

夢叶う。美味しい笑顔広がる。



写真：小田初美さん（左）と夫の淳也さん（右）

「喫茶アカリトキ」経営 小田 初美さん

川内川沿いの空き倉庫を活用した商業施設「SOKO KAKAKA」。古本屋、チーズケーキ屋、花屋など7店が入る空間の真ん中に、小田初美さん・淳也さん夫婦が営む喫茶「アカリトキ」があります。様々な出店者さんの顔が見えるオープンスペースで、自家焙煎珈琲と焼きたてパン、お惣菜やスイーツでほっこり。「店舗同士、商品を勧め合ったり、不在の時は代わりに売り子をしたりと協力的で、この雰囲気が好きです。」と初美さん。「今度は私たちが、移住者の支えになりたいです」と笑顔で語ってくれました。

薩摩川内市



京都の飲食業界で20年修行。空き倉庫を改修した施設で賑わい創出。



移住のきっかけ、決め手はなんですか？

京都出身の夫が、「薩摩川内市で自分の店を持ちたい」と言ってくれたことです。私は「え？いいの？」と驚いて、むしろ私の方が、「刺激の多い京都にもっといたい」と思ったくらいでした（笑）。でも、地元に戻ってチャレンジするのも面白そうだなと考えるようになり、京都のいろんな飲食店で修行したり、薩摩川内の人とつながりを作ったりしながら移住・開業の準備を進めてきました。下の子どもの小学校入学をきっかけに、2019年4月にUターンしました。



これから薩摩川内市でやっていきたいことは？

たった二人で始めた店ですが、スタッフが増え賑やかになって嬉しんです。お客様には気軽に来てゆっくり過ごしていただきたいですし、私たちがここに根を張り、「SOKO KAKAKA」を盛り上げて、次に移住してくる方の不安を解消し挑戦を後押しできる存在になりたいです。



ご主人はパン、惣菜、スイーツ担当

薩摩川内市でどんなお仕事をしていますか？

2021年11月から空き倉庫を活用した商業施設「SOKO KAKAKA」の中にポップアップ出店し、2022年11月から常設店として営業を始めました。夫が調理、私が接客をしています。

出店のきっかけは、息子の習い事の送迎中、ラジオで「SOKO KAKAKA」プロデューサーの田尾さんが喋っているのを聞いたことでした。「川内川に人が集まる風景をつくりたい」と故郷への想いを熱く語られていてビビッと来ました。翌日にマルシェがあると告知をされていたので、早速会いに行きました。ネットで田尾さんの顔を調べていたので無事にお会いできました（笑）。「SOKO KAKAKA」の構想を聞いて共感し、オープンから一緒にしたいと申し出て出店者として入れてもらいました。田尾さんには資金調達や創業などで何かとアドバイスいただき本当に心強い存在です。



自家焙煎のコーヒーと焼きたてのパン、丁寧に仕上げた和洋の惣菜やスイーツを提供



川内川を日常的な居場所に「SOKO KAKAKA」 「喫茶アカリトキ」

薩摩川内市のどんなところが好きですか？

何もしなくても人が来る京都に比べて、「どうしたら人を呼び込めるか」と一生懸命に考えている人が多いと感じます。夫は初めて鹿児島に来た時、「美味しくて新鮮な食材がスーパーで簡単に手に入る」ことに感動し、薩摩川内市で店を持ちたいと思ったそうです。教育面については学校が熱心に指導してくれているのかなと思います。京都では塾や複数の習い事に通っているのが当たり前でしたが、薩摩川内市では京都よりも習い事に通う方が少ない印象です。

これから移住を考える人へのアドバイスは？

私たちはいつか薩摩川内市で店を持ちたいと思って準備してきましたし、親族の繋がりもありましたが、全く繋がりがない状態での移住・開業は、お客さんや仕入れ先とどうつながったらいいかなど、苦勞すると思います。時間をかけて積極的にいろんな人とつながっていくことをお勧めします。

「SOKO KAKAKA」オーナーからのコメント／田尾 友輔さん

土日のイベント時しか開けていなかったSOKO KAKAKAを、小田さんが毎日開けてくださることになり、地元の人たちが立ち寄れる場所になりました。川内川沿いに新しい可能性をもたらしてくれた小田さんに感謝しています。移住・創業は簡単ではないと思いますが、薩摩川内に定着して成功してもらえよう、サポートをしていきたいです。



DATAで鹿児島と東京の暮らしを比較

鹿児島では東京に比べ、教員1人あたりの児童数が少なく、一人の子どもの寄り添って、きめ細かな指導の充実が可能となり、手厚いサポートが期待できます。

教員1人あたりの児童数（小学生）

鹿児島 11.8人 東京 17.2人

出典：日本の統計2023